

暴走する世界

グローバリゼーションは
何をどう変えるのか



市田 知子

本書の著者アンソニー・ギデンスはイギリスの社会学者であり、ブレア首相の知恵袋としても知られる。本書は本文 162 頁とコンパクトであり、学術書というよりも啓蒙書に近いが、その内容は多岐にわたり、含蓄に富む。原著「Runaway World」の初版は 1999 年、邦訳版が出てからもすでに 3 年近くになり、各方面で紹介されていることを承知で取り上げることとする。

「第 1 章 「グローバリゼーション」の本質」では、グローバリゼーションという事実とそれに対する様々な評価、解釈について論じられる。交通手段や通信技術によって、地球が狭くなった現在、「事実」としてのグローバリゼーションは誰の目にも明らかである。このような変化を過去の時代の延長に過ぎないとする「懐疑論者」に対し（曰く「ほとんどの国の国民所得に占める貿易の比率はごくわずかである」）、「ラディカルズ」は国家の統治権範囲の縮小、貿易や国際為替取引の飛躍的増大をとらえて、その革命的な変化を強調する。著者は後者に与しながらも、他の論者と異なり、グローバリゼーションが家族や個人の生活にも及んでいると主張する。冷戦終結後、国民国家が「敵」を喪失し、再定義を必要としているように、家族、仕事、伝統もまたその中身を変えてしまっている。これらの制度は、時代の変化に合わせて中身を再構築しない限り、「貝殻制度」となり果てるしかない。

「第 2 章 多様化する「リスク」」によれば、リスク（risk）の語源は 16 世紀の大航海時代のポルトガル語（「あえておこなう」）であり、その頃も人間は様々なリスクに直面していた。だが、近代産業社会以降は、伝統や自然に起因する「外部リスク」に加え、科学の進歩、人間の制御可能範囲の拡大がもたらした「人工リスク」、さらに両者の「複合」リスクにも直面している。「人工リスク」は多様であり、前例がなく計算不能である。科学的知見が不十分な場合に措置を講じる「予防原則」、科学

技術とのより開かれた関係の構築などにより、「人工リスク」の被害を最小限に食い止めることはできるだろうが、完全になくすことはできない。

「第 3 章 「伝統」をめぐる戦い」では、伝統（tradition）がその語源であるラテン語（tradere）、すなわち「なにかを他人に伝達すること」から説き起こされる。伝統という言葉が今日のような意味で使われるようになったのはたかだか 2 世紀前である。伝統は権威付けのために捏造されたり、わざわざ保存されたりする。人間生活が連続性をもち、様式を定めるために、いまなお伝統が必要とされ、とくにそれは学問や宗教の世界で顕著だが、グローバリゼーションのなかで伝統の影響力は低下しつつある。

「第 4 章 変容をせまられる「家族」」では、自己と他者の関係の変化、とくに家族や結婚の変化、「貝殻制度」化が述べられる。1950 年代に欧米諸国で支配的となった「伝統的家族」では、夫が生計を支え、妻が専業主婦であり、両者の子供と暮らしていたが、いまやそのような家族は少数派である。男女のカップルの根拠は、結婚により一つの経済的主体をなすことではなく、二人の「純粋な関係」に求められる。「純粋な関係」は、互いのコミュニケーションや情報開示が双方に利得をもたらすことによるのみ維持されるという意味で、民主主義の理念に通じる。

最終章の「第 5 章 「民主主義」の限界」によれば、民主主義は複数個の政党が政権を目指して激しく競争するシステムであり、国民による平等、公正な選挙を伴う。今日、民主主義は世界中に広がっているが、政治家は自己利益を優先し、有権者は政治家に幻滅している。中央から地方への実効性ある権限委譲、既成政党と環境保護団体などの共闘、国民国家の枠組みを超えた民主主義の実現（EU は一つのモデル）などによる「民主主義の民主化」が求められている。

本書の読み方にはいろいろあろう。リスクの章は BSE など昨今の食品関係の事件にも当てはまるし、民主主義の章は国政選挙や職場の労働組合を想起させる。要するに、普段、我々が生活するなかで何かしら思い当たることについて書かれている。もちろん、ギデンス入門書としても適切だろう。

グローバリゼーションをリスク、伝統、家族、民主主義という、一見、結びつかない事象を鍵に読み解くという展開により、社会学ならではの奇想天外な面白さが味わえる。そうした面白さは反面、論理の飛躍や荒削りであるとの批判を招いているようだ。